



## 室内環境学会理事長あいさつ ～スマート・ソサエティを目指して～

東海大学 関根 嘉香

(聞き手：出版委員長)

—はじめに新理事長に就任した今の心境をお聞かせください。

**関根** 本学会は1994年に室内環境研究会としてスタートし、1998年に室内環境学会となりました。シックハウス問題等を背景に会員数が増加し、毎年12月に開催される学術大会の規模も年々拡大しています。そして、2013年より中井里史前理事長（横浜国立大学）のもと、一般社団法人室内環境学会となり、体制的にも財政的にもより逞しい組織になってきました。この間、理事会を支える事務局の貢献も多大なものがあります。月並みな言い方になりますが、このような着実な歩みを進めてきた本学会の舵取りを担う重責をあらためて感じています。

—平成29年度から目指す方向は何ですか。

**関根** 現在、会員数は正会員，法人会員，学生会員，シニア会員をあわせると500名規模となります。本学会は数年前まで財政的に厳しい状況にありました。しかしながら、支出をなるべく抑えながら、学術大会の充実，セミナー開催や書籍の出版などの事業活動を展開することにより、ここ数年の財政状況は顕著に好転しております。これからは内容の充実をより一層図り、会員の皆様が入会して心から良かったと思える学会にしていきたいと思えます。

—具体的な方針をお聞かせください。

**関根** 一つは「会員サービスの拡充」です。これには二つの意味があり、すでにあるのに利用されていない機能を使いやすくすること、もう一つは新たな機能を搭載することです。

—以前、スマートフォンに例えていましたが…

**関根** 私もようやく最近になって、ガラケーからスマートフォンに変えたのですが、ガラケー時代は搭載されている機能の一部しか利用していませんでした。しかしスマートフォンになるとアイコン表示がわかりやすいこともあり、自然といろんな機能（アプリ）を使ってみたくなりました。学会も同じです。室内環境学会にはすでに様々なアプリが搭載されて

いますが、今一つ伝わっていないのかなと感じています。その入り口のところをわかりやすくすることが大切です。

—例えば、分科会活動がありますが、どうすれば参加できるのか、どうすれば新しい分科会を立ち上げられるのか、知らない会員もいるかもしれません。

**関根** そうですね。現在学術委員会の管轄のもと、微生物分科会，燃焼器具分科会，化学物質分科会，微粒子分科会があり、今年の2月に新しく災害時室内環境分科会が設立されました。分科会はそれぞれの計画に基づいて活動されており、もし参加したい場合は分科会長にご相談頂ければと思います。また新たな分科会を設立したい場合は、事務局を通じて設立申請書をご提出いただけます。会員の視線に立った学会機能のご案内をこれからも心掛けていきたいと思えます。

—新しい機能（アプリ）はありますか。

**関根** 二つ目の方針である「グローバル化への対応」に関係しますが、国際交流をより積極的に進めたいと思えます。2012年に東京・高輪で開催した学術大会において、MOUに基づく日韓室内環境学会による国際シンポジウムを初めて開催しました。以後、台湾、韓国と持ち回りで開催するようになり、本学会からスピーカーを派遣する一方、昨年につくば大会において日本で2回目の国際シンポジウムを開催することができました。今後はさらに三国間での合同学術誌の刊行，他の国も含めた学術交流が出来ればと思っています。

—学会誌「室内環境」についてはいかがですか。

**関根** 「室内環境」誌は今号でいよいよ第20巻となります。川上裕司先生がリニューアルされた第10巻以降、年2回（6月，12月）の定期刊行が堅持されています。さらに掲載論文はJ-Stageでも公開されていますので、誰でもアクセスが可能です（注：公開後1年間は会員のみ公開）。また本学会が日本学術会議協力学術研究団体に登録されていることが

ら、掲載論文は博士号の学位申請にもよく利用されていると聞きます。出版委員長とも相談しなければなりません、学会誌の年3回発行、あるいは日韓台合同学術誌の刊行、いずれかを実現したいと思います。

—発行回数を増やすとなると投稿論文の質の確保だけでなく、数の確保も必要です。

関根 その通りです。質に関しては、従来の査読システムの運用で確保できると思いますが、問題は数です。そのためには「室内環境」誌に投稿するモチベーションをどう高めるかということです。直接的な回答にはありませんが、三つ目の方針として「プレゼンスを高める」を掲げたいと思います。本学会の存在感が高まれば、自ずと会員も増え、学術大会の演題数や論文投稿の機会も増えてくるでしょう。

—そのためには広報活動も大事ですね。

関根 ホームページは非常に情報量が多くかつよく整理されており、本学会活動の最も主要な広報メディアになっています。一方で、SNSは若い世代に対して影響力が強く、とても重要だと思っています。

—若い世代というのは学生も含みますか。

関根 はい。学会が将来的に発展していくためには、次の世代が育っていかねばなりません。ここ数年、学術大会のプログラムとして学生懇談会が開かれ、学生会員同士の交流の場になっています。2009年静岡大会が第1回目と記憶していますが、当時の参加者の中で、現在正会員として活発に活動されている方もおられます。学生会員が学会運営により深く関与できる方法があれば検討したいです。

—「プレゼンスを高める」という意味では、産業界との連携も重要ですね。

関根 本学会は、学際的事であることと同時に、産・官・学の連携が活発であるという特徴があります。事業委員会が主催する室内環境学会セミナーは、現

在年2回（9月に幕張、1月に大阪）開催されており、毎回多くの企業関係者が参加されています。また室内環境学会標準法の制定についても随時受付していますので、気軽にご相談頂きたいと思います。さらに、本学会の学術資源をご活用いただける研究助成制度もあります。法人会員をはじめ多くの企業様にご関心をお寄せ頂きたいと思います。

—最後にどのようなリーダー像を描いていますか。

関根 リーダーには様々なタイプがありますが、自分はサーバントリーダーに近いようです。研究活動に取り組まれる会員の皆様に奉仕する気持ちでスマートな学会運営に当たりたいと思います。これから二年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。



スマート・ソサエティを目指して